

真生

第三卷 第二號

▽靜に凡ての名利を離れ、此身と心との一切を捨離しても、尙そこに獨り残るは慈光に輝くミオヤである。ミオヤは實に天地の光である。

▽されど天の嵩きも地の宏きも見ん眼なき人々には現はれず、人の望みも喜びも光無き人の心には判らない。

▽凡てのもの皆空にして依るべ無く、天も地も、山も川も何一つとして頼る無きに、唯一つ眞に據るべきはミオヤの光りである。

▽夜靜にして人なき所、靜にミオヤの慈光を仰げば一切は歡喜に輝いて來る。限り無き心の憐みも、限り無き此の世の辛さも、凡ては喜びの世界と變る。

▽凡ての者は我を捨るとも如來のみは我を捨てず、凡ての者は我を憎むとも如來のみは我を憎まず、ミオヤは實に吾等の光である。

▽生るも死ぬも凡ては光り、空嵩き天の彼處にも恵み深き地の此處にもミオヤは在ます、智慧の光りと慈悲の光りに輝きて、總てを抱みミオヤは在す。

▽オウ懷しき我がミオヤ、ミオヤは此の世の光りである、天地の主たる我ミオヤ、天も地も山も川も草も木も、一切はミオヤの慈光に生きてゐる。

▽春の芽ばへ、夏の茂り、秋の實りも、又冬枯れの姿まで凡てはミオヤの光である、總ては、ミオヤの恵みである。(念)

偉大な宗教

目次

△偉大なる宗教	魁子
△稱名念佛に就て	土屋觀道
△懺悔録(二十)	演阿彌
△還愚の體驗	魁子
△吾朋便り	
△報告	

石を除ける。地下に蛙が安然と坐り込んで、深い思惟に人根も深く潜み、大地の母の懷に入て有分温みに涵つてゐます。つて。皆暖み求め、落付き場所を求めて中心へともぐつてゆく。

それ、たゞ人間の魂の安らひ場所もなく、フラフラと食ひたいと云ふ一つを望みに淋しく人生の曠野を迷つてゐる、西伯利亞の原野を辿りてゆく囚人の様に生る。すると傍らで絶え絶えな水原を渡つたら暖い華の都がある。そこ云ふ者があつた。而し我々は此等の人を見ぬ前に朽折れて了ふのだらう。我々は此等の暖い華の都がある。塗説に過ぎぬ、疑ひ極め、唯だ現實の「苦」あるのみ。然し氣を付けると足下に此原野にも重い雪に虐げられ無いらしい花が一つ咲いてゐる。彼女には多分云ふものがはいぢらしい。總てが春であり喜びであるらしい。何と云ふは何をそんなに感謝し喜んでゐるのだ。花の心だらう、お前にも寒いと感ぜさせる温たみがある、此の花は其暖みと光とを吸つてゐたのだ、そこには偉大なる否定に即する肯定がある。悲哀に即する歡喜があり、地獄に即する天國がある。

此「即」の妙に觸れた時、矛盾と撞着と不調和とが其儘何の滞りもなく素抜けて行く、それが「解脱の世界」であり、「悟り」の境致である。(魁)

『死者をして死者を葬らしめよ』
それにも係らず生きた人間共が大量になつて掛りはてゝゐる、葬ると云ふ事と追弔と云ふ事とが、宗教の代名詞のやうになつてゐる、被服廠跡が宗教の塊りの様に自他共に許してゐる。それは『死んだ宗教』の舞踊に過ぎぬ。

新人は云ふ宗教は統計と施設である。配給と慰療、簡易圖書館や少年會、職業紹介や養老、——それ等が新時代の宗教として焼跡に重寶がれてゐる、そして『パンのみにて生くるものに非ず』と云はれたのを反證する『肉の宗教』を將來した、而し宗教は『數と量』との中に溺死するものではない、それは『固形の宗教』だ。

此外に宗教ありとせば『職業宗教』だ、出し入れ勝手な商品傳道の取引である、さもなくば芝居がかりの『行儀宗教』である。此等は皆な『衣裝の宗教』である、眞實なるものは衣裝から生ずるか、衣裝は眞實の光りであるが、特に宗教に於ては二者の關係、其本質を再顧するの要がある。

宗教は人間の本性に還て、其至美に觸れた時自然に發する妙味である、生きた幽玄味であり、リズムである。自己の裡に眠れる偉大なる魂が呼び起されて、發して無限の大悲となり無礙の大度生となつたものである。自己への深い辿りであると同時に、其自己の中へ攝せられた法界一切を復活せしめなくては己まぬ大覺他であり、大覺行である。佛は遠く西方に在ますと俱に、此頭上に、此己心の中に大きく成り給ふ、此尊き此大いなる如來に動かされて一切時、一切處に不易不動の不行を緣じて行く、そこは眞實の宗教的態度がある、此大中心を離れずして建設される處、そこに眞實の宗教的社會がある、單なる便利主義や實用論者の作意に因て形成された『數』でもなく、又功利論者の能律本位から出た『物』でもない、生命と希望と力に充ちた現實こそ偉大なる宗教である。

(魁子)

稱名念佛に就て

人格主義的淨土教 (四)

土屋觀道

「私は昨年來人格主義的淨土教を題して淨土教が如何に人格主義的であるかといふことを三回に渡つて述べたのであるが案外に道中の共鳴者も多く幾多讀者の申込みもあり且つ又其の次ぎをささへ申入れる人々も多いのであれば更らに進んで今少しく此の意味の主張を述べさせていたきたい、殊に此の私の念佛の主張は主として私の信する法然上人の教義其のまゝを寸毫も私するところなく述べたのであれば恰も上人開宗の七百五十年の記念ともなること、存じ、我が宗祖の念佛に就て深く共鳴するところの同志と共に、又之に反して遺憾の心を以つて見られる人々に對しても私は此の一篇を精讀していただきたい考へである。」

さてこゝに稱名念佛といふ、乍然此の稱名念佛は實に法然上人の一代を貫ぬく最高の理想であり結論であつて、釋尊出世の本懷も如來大悲の本願も要するに此の稱名念佛の一句に結歸するのであれば之こそ佛教に於ける宗教生命の中心をなすものともいへるのである。従て稱名念佛とは如何なる意味での念佛であるかとは眞に道を求むるもの、最も大切に又最も熱心に聽かんとするところのものである。乍然その念佛が如何なる念佛であるかといふことは己に先年私は信行の念佛と題して四回に渡つて述べたのであるから今は暫く之等を措いて、こゝには所謂稱名念佛が如何に人格主義の念佛であるかを述べたのである。否むしろ此の論題としては斯く見來るのが即ち正統の見方であつて、殊に近來社會思想の一大潮流として宗教信仰の勃興となり殊に佛教思想の隆盛を見るに當つて、我が淨土教の稱名念佛が所謂單なる愚夫愚婦の迷信にも等しき稱名念佛にあらずして反て最高唯一の佛教思想の生命中心であり人格主義の念佛であるといふことを自らにも反省し、又我が同胞の人々にも等しく之を説述するといふことは決して道を愛し人を思ふといふ點に於てもまちがつた考へではないのである。

然らば稱名念佛が如何なる意味に於て人格主義的であるであらうか、之を外見よりすれば念佛は只ひとへに阿彌陀佛の御名を稱するばかりであり、耳にきこゆるところは南無阿彌陀佛の聲のみである。而て之を信者にきけばそれは南無阿彌陀佛と申すばかりであるといふ、尙立ち入て尋ねれば、觀念の念でもなければ念の心を悟つて申す念佛でもない、只往生極樂の爲めには南無阿彌陀佛と申して疑いなく往生するぞと思ひとりて申す外には何の子細も無いといふ。乍然之を今日の科學だの、哲學だのとしきりに學問さたにのみ興味を持つた人々が聞いたなら之はごあつけない又たよりのないものはないかも知れない又何故に往生極樂が念佛申したばかりで出來るのであるかと問へばそれは如來の本願でありそれは如來の誓いであるからといふ。どうしてそれが本願であり誓いであるかと問へばそれは自分達には判らない、只さうだと經典に書かれてあり、又さうだと自らも信じ人にも教へた法然上人のあるのを以て私共も亦夫れをさうだと信するのみだといふ。

乍然若し世の中に之を以つて自分もさうだと信じうるならば之はごたやすい氣樂な宗教はない、さうして又世の中に之はご申しよい念佛はあるまい。乍然果して是丈けの念佛が今日の多くの人々にどれ丈け眞に信せられ又どれ丈け眞に申されてゐるであらうか、さうして而かも此の念佛が所謂本願の念佛であり、釋尊所説の念佛であり、従て法然上人の御すゝめなされた眞の念佛として正しく此の世に傳へられ正しく人々に稱へられてゐるのであらうかとは之を上人の念佛に考へ之を今日の人々に思ふ時、轉々其の反省の必要あることを感ずるものである。而かも世人ともすれば此の稱名の念佛を卑しきもの

かの如くに輕んじ、反つて觀念の念佛を重とし、或は念の心でも悟りて申す念佛を以つて更らに尊いものかの如くにさへ、或は考へ、或は全く信じてゐる人もあるのである。而も、稱名念佛の眞意も知らずして色々之を哲學的に考へ或は哲學的に念佛を解釋することを以つて一層に正しくもあり、又一層に尊いものでもあるかの如くに智者ぶる人々があるに至つては更らに大なる誤まりであるといはねばならぬ。而て己にそのことは法然上人の法語の上に顯はれて、『學生骨になりて念佛や失はんずらん』と又『智慧をみがきて悟りを開くべくは源空いかでか聖道門を捨て、淨土門に趣くべしや、聖道門は智慧を磨きて悟を開き淨土門は愚痴に歸りて念佛して往生はするなり』と。之を以つて之を見れば上人の念佛は學門さたの念佛でもなく、又智慧を磨いて悟りを開く聖道門的念佛でもない。さうしてむしろ之等の學問沙汰を悉く打棄て、全く愚痴文盲の身になして只一向に念佛するところにあつたのである。いはゞ上人の念佛は一切の學問を離れて智慧をもらさず、又慈悲をもらさず、道徳などをも一切眼中になくして只そのまゝ全身全意念佛に投入せられたのが此の上人の念佛であつたのである。

乍然こゝに單稱の念佛といひ或は稱名の念佛といふ、而て夫れが又本願の念佛であり、釋尊附屬の念佛であるといふけれども、其の單稱の念佛といひ稱名の念佛といふことが如何なる意味での單稱であり稱名であるであらうか、從つて其の稱名そのものが稱へられる時の信者の心的内容は如何、又其の稱名の念佛となる前後の心的状態は如何にあるべきか、ただ南無阿彌陀佛といふことは申すばかりとはいふものゝ、或は一面念佛には必ず三心を具すべしとさへいはれてゐるではないか、而てそれは現に經典の上にも明に言はれ、又念佛の開祖といはれる支那の善導大師の言葉にも亦我が國に於ける念佛の宗祖法

然上人の御言葉にも現に明かに述べられてゐるではないか、加之、又或る所には念佛申す人は世に多いけれどもまことに往生をさげる人は少ないと云はれ、而かもそれはまごゝろがないからだとのこといはれてゐるのではないか、して見ればこゝに單稱といふことは決して單なる單稱のことではない、さうして三心も具せない念佛でよいといふことでは勿論ない、少くとも三心を具した意味での稱名であり念佛であることは以上の文によつても知ることができるのである。從て三心の具した念佛とは如何なる念佛であり、又如何にすれば三心の具した稱名の念佛となるかといふことは、少しく道を求むることまことなる人々には必ず心せなければならぬ問題である。乍然てこゝに改めて注意しておくべきことは、それは三心の明説やいはれを知つたり信じたりせねばならぬといふのではないといふことである。即ちそこには三心のこもつた念佛でさへあればよいのであつて、三心の具した念佛は必ずしも智者の念佛でなければならぬといふのではないのであつて、三心の具するといふことは智者でない一文不知の愚痴文盲の人々や善人といはれる程の人でない悪人や罪人といはれる人々の心の中にもできるところの念佛であるといふことである。乍然かくの如きの念佛がどうして本願の念佛であり、さうして又それがどうして三心を具し得た念佛であり、而かもそれが又どうして人格主義的淨土教の念佛であるであらうか。而てこゝに最も淨土教の他の多くの人々に誤解せられ易い所があると共に又こゝに特に淨土教の宗教として多くの宗教に超絶したところがあるのであるが世間の人々は反つて之をなほざりに見捨てゐる。

さてこゝに一般世人に誤まれ易い事は如何なる愚人も又如何なる罪人も只の一遍でもたゞ南無阿彌陀佛と申しさへすれば皆悉く如來の極樂淨土に生れるといふことである。さうして此の間に於ける一般

の誤解に就て二つがある、その一は如何なる愚者も罪人もといふ點に就て、今一つは只一遍でも南無阿彌陀佛と申しさへすればといふ點に就てである。前者はどうして愚人や罪人が淨土に往生することが出来るか、世間の考へからすれば愚人や罪人はむしろ地獄にこそ墮つべきでないか然に愚人や罪人が念佛申した丈で地獄に行かすして極樂に往くとはけしからんことである。それでは此の世でよい事をしたもののや智慧を磨いて悟りを開くといふやうな困難な仕事をするといふことはばからしいことではないか、又かゝる教は此の世の社會生活上からいつても決して正しい事ではない、何となれば若し世間の人がかゝる教へをまともに信することゝもなつたならばそれこそ念佛ばかり申してゐて、此の世の中に於ては少しの善事も行はず、何等學問も研究もなすことなく、悪いことしてもかまはない、バカでもよいといふ風な氣風も起すことゝなつて、社會の進歩はもとより、社會は直に暗黒闘争の巷となつて終ふであらう。乍然かくの如きの世人の誤解は一面世間の道理を辨へてゐるかに見えて未だ眞に世間の眞相を知らない人々の見解に過ぎぬものである。而てそれは之等の宗教に於ける缺點ではなく、單に之等に伴ふ一般世人の誤まり易い點に過ぎないものである。而て尙それは夫れにも勝る宗教の一大特長生命を見失つたところの考へに過ぎないものであるといはねばならぬ。尤も世間が愚人を欲せず、罪人を嫌ふといふことは事實である、さうして又かゝる人々が尙將來に於てこのまゝにしておくならば決して世間の爲めにもならず、又その人自身の爲めにも生存の價値を有せず、従つてかゝる有様では死後に於ても決して樂しき淨土や天國に往生するものであるとは考へられないと云ふことは決して誤つた考へではない。乍然更に一步を進めて之を觀察せよ、そこには更にそれよりも偉大なる如來の大悲が輝いてゐるで

はないか。而て人は愚人をのみ惡み、惡人をのみ嫌い、罪人をのみ罪みするもののみではない。少しく其の本人の立場に立つて自らを見よ、そこには實に無限のやるせなき同情の涙がその人々の上に注がるゝではないか、身自ら愚人として生れたりせよ、而してそこに何の望みもなく、又身自ら惡人として生れ來たならば如何であらう。まして爲すべきことの一要をなし得ず、爲すべからざることのすべてをのみなすところの罪人となりおうせたであるならば之は此の世にあはれにも亦氣の毒なものとはないではないか、而て若し自分が今人を難じたやうな心持ちで自分自身の境遇を考へて見たならば如何であらう、私はかゝる時かゝる人々に對して斯かる恨みと惡みと嫌いとを以つて之に對しうるものではない。而てかゝるいともあさましき境遇におかれたる人々をあはれみかなしみ之を善人に救ふ可く無限の同情を以つて之に接するといふことは果して惡むべき事であらうか、而て此の世には自ら罪を作つて夫れでもよいとのみしてゐるものばかりではない、否自らは如何に努力しても自らの力弱くして遂になすべからざる多くの罪みを作りつゝ自ら苦む人々も多いであらう。而かも一度作したる世間の罪は如何なる場合に於ても己に一つの罪である限りいかに悔いても悔いても己に消ゆ可きものでなく、其他自ら不幸にして身愚鈍に生れ、如何につとめても己が望みの萬一をもならず、たまゝ自ら望を立つるも其の智足らずして之に達する方法もできず、自ら愚かなることを知り乍ら而かも其の愚を如何ともし難いものがあるに至つては、之をどうしたらよいのであらうか。借問す、之等の宗教を批難する人々よ、果してさういふ人々は身自らにどれ丈の賢者であり、又智者であり而て又どれ丈の道德賢固の君子であらうか、凡そ賢といひ愚といひ、徳といひ罪といふ之等はすべて多くは比較相對の言葉に過ぎ

ないものではないか、而て之を自己よりも愚であり、罪である人々に比ぶればこそ身自らを智なり賢なり徳なりともするのであれ、乍然之を一度自らの理想に照らし之を絶對の如來に比較し、そこに一切知能の眞人を想ふ時、果して今日の如き自分に向つて眞に誇るべき幾何の智と賢と徳とがあらうぞ、而も此の意味に於て自分自身の現在と將來とを以て自ら之をのしることができ得るであらうか、而て夫等に對する無限の同情と無限の力を以て之等を哀れみ之等を救ふところの我がミオヤ即ち我が肉身の親よりも更らに大にして根本たる宇宙大悲のミオヤに歸るといふことがどうして不可といへるであらうか而て此の世に於ても之に似たるはまことに其の子を思ふ親の慈愛である。否それは單なる親の子に對する慈愛ばかりではない、少しく此の世の人情を辨へ少しく社會人類の共生の眞義を理解するものならば反つて自らの之等に對するいと深き責任の罪こそ感ずれ、決して之等を以て單に愚人なり罪人なりとしてのみ取扱ふもの許りではないのである。然らば斯の教を以て人を誤まり世を誤まるものとのみならず如きは之亦全く大なる考へ違いではないか。何となれば凡そ世の人の智慧を磨き、徳を行ふといふが如きはそれ自體に於てよきことであり、人がそれをせないでもよいからと教へられたから、せないですむとか、或は又愚人であり罪人であつても嫌はないからといはれたからとて、それでよいとして止まりうべきものではない。而て、それはそのこと其のものが愚であり惡であることを知つた上からはせよといはれても爲すことを欲するものではないのである。而てそれは教へそのものゝ罪ではないのである、從て愚人でもよい罪人をも嫌はぬといふことは何も愚人であれ、罪人であれといふことではない。否愚人であり罪人であることを欲しないが故にこそ、愚人も罪人も淨土に往生して立派な身にもなりた

その心も起り、又かゝる教へが愚人にも罪人にも信せらるるのであるのではないか、而て殊に如來が如何なる愚人も罪人もひとしく救ふと云ふことは更らに夫等の人々までも等しく佛陀の生活に入らしめやうとする如來大悲の顯れの極ではないか、然るを世人稍もすれば此の深遠なる如來大悲の方便を知らずして輕々にも之を難じ去らんとするが如きは寧ろ其の痴に於て笑ふ可く其の愚に於て哀れむべきの至りである。況んや如何なる罪人も又如何なる愚人も皆悉く如來大悲の靈界に往生し得るといふことは是等の人々をして悉く佛界に轉入せしめやうとの一大如來の大悲の内在してゐるに於てをやである、されば如來の救済には唯そのまゝとはいふものゝそこには念佛してといふ事がいはれてゐる。

而て念佛するものは往生を得と、念佛せずしてとの教へはどこにもない。而かも其の念佛申すところ其の念佛は只申すばかりなりといひ、或はたすけ玉へと心に思い口に南無阿彌陀佛と申すばかりであるといひ、殊に甚しきに至つては只申すばかりである、申しさへすればよい、申せば必ず生れる、救かるさへ言はれてゐる。否更らに進んでは信と不信とを問はず、稱すれば即ち生ずとさへすゝめてゐるのであつて、そこには寸毫の愚をも責め罪をも罰めるの心が現はれてゐないのであるが、而も愚を賞し、罪を喜ぶものではなく、愚はどこまでも愚であり、罪はどこまでも罪として天地の大道に脊くものとなし、而して此の間一切の愚人と罪人とを哀れんで之等のものをして悉く念佛稱名の一行によつて如來の靈界に轉入せしめ、諸佛と等しき佛陀の境涯に到らしめやうといふことは偏へに如何に如來大悲の御心が念佛一行にこめられてゐるかを伺ふに足るのである。(二三、六、一)。

懺悔錄

(二十)

演阿彌

噫々常に私の全體を包み恒に私の全き世界を覆ひ給ふ尊嚴にして然かも戀しく懷かしき我が如來様よ。日本に於ける念佛の創始者として私達の最も懷かしむ祖聖法然上人の遺續に於て今日から五日の間親しく私自身の菩提が念佛に依つて祈られ得る事は本當に計り知る事の出来ない不思議の一つであります。斯る思ひのせらるゝ爲か非らずか。此朝祖師堂に參拜致しました私は或宗教感情が高鳴りして故聖の鴻恩に感泣せずには居られませんでした。而て『まあ何と云ふ幸せ者よ』と私自身を喜ばすには居られませんでした。實際唯今に成つて追懷して見ますと幼稚は幼稚乍らにかなり充實した五日間でありました。幾度如來様の大悲恵に思ひ到つては法悦歡喜の涙をこぼした事でせう。幾度自身の現在を思つては祖聖の恩に感謝の涙を拭つた事でせう。而して妄想に苦笑し或種の魔禪に（夫は今も忘れ兼ねたエクスタシーの一

つではありますが）喜んだ事よりも此如來様への宗教感情や祖聖への感謝の涙こそは本當に大師遺續の地に來たればこそであります。然し茲は三昧道場としては或條件を付けない限り餘り適當の處ではありませんかと思ひます。夫は道場と休息所との間が餘りに離れ過ぎて居るからであります。而して夫が石段に據らなければならぬからであります。十九日の正午前でありました。妄想雜念に惱んで或る絶望をさへ感せんとする時、櫛柄のバィがボンと折れて仕舞つたので『嗚呼』と長大息をして合掌し乍ら唯だ我拙さを愁しんで居る内、フト眼瞼が痙攣し始めました。すると眼前が眞赤に焼けて精神が一定の型にはめられ頻りに其禪悦に酔ふて居りましたが間もなく休憩時が報せられ大衆と共に中食に降りて行かねばならなくなつたのであります。然し私は此儘茲で此境を享樂し度かつたので暫く立たずに居りましたが大衆の半ばが道場を出たかと思ふ頃群衆心理に誘はれたかツイフラフラと座を立つて仕舞ました。宛かも毀れ物を抱く如く靜に靜に石段を降りましたが何分にも

眼瞼が痙攣して居つて目を見張る事が出来ませんでした。凡そ三分一も來たかと思ふ頃ストンと石に墮いた爲にアワヤ膝を打たうとした時全く其境は毀れて仕舞ました。禪悦に餓鬼相を現じて居りました當時の私は非常に残り惜しかつたので石段への憾みは今も猶ほ残つて居る事でせう。私はもう色々な幻覺に對してはサツバリ私の信仰の上に價值を認める事が出来ない様になつて居ります。唯だ如來様と一體にならんとする戀の感情が定の中の喜覺に強く味着して唯だ夫のみが望まれてならなかつたのであります。無論幻覺的宗教經驗と雖も一種の心的快味はありますので内心の何處かにはまだ寧ろ歡迎して居る所があるかも知れませんが高潮せる欣慕の感情とは到底比較にならないかと思ひます。然も經驗の直後に智的反省の苦笑を伴ふものをやであります。一體私が幻覺を排せんとする心理は幻覺に對する無理解に對する老婆心に外なりません。元來幻覺と云ふ事は普通の五感作用で經驗し得る普遍的知覺に非ざれば特殊の感覺に名付けた事で空間的存在でない物を觀念の刺激

に依つて知覺する主觀的所産なる事皆様御承知の通りで委しくは幻視幻聽幻想等と云ふ可きであります。隨て此言葉は心理學的用語であつて宗教的には矢張り妄想とか明相とか見神見佛とか言ねばならぬのでありませう。而して信仰上順縁的價值を有する物を明相とか好相とか云ひ逆縁的價值即ち反價值が無價值か若しくは價值僅少なる物を妄相とか魔相とか云ふ可きなのでせう。けれども注意せねばならぬ事は意持の如何に依つては好相は直に魔相であり魔相直に好相なのである事と今一つは其明相等に有相と舞相との二面ある事であります。今云ふ所の幻覺は好相魔相に係らず有相の状態に名付けたのですから幻覺必しも無價值だと云ふのではありません。唯だ其幻覺たる事物を靈的と云ふ思想に智的反省を痙痺せしめて普通に云ふ客觀的事物と均しき意味に誤想するは頗る低級なりと斷定せねばならぬのであります。況して眞正純粹經驗の三昧境に於ける見佛は無相の上の知相で正しく有無の二邊を破つた所の通常の言語を以てしては到底云ひ現はす事の出来ない眞覺の境

界なるをや。今夫をしらずして又若しくはしつて居つても有相を以て高級なりと思惟する所に其人の低級さを思はずには居られません。否な夫に依て信仰の長養を阻害せらるる事を悲しまずには居られません。かの有名な聖ルイスの如き最もよい例であります。誠に宗教的情操に或偏見を持つ人は一面強い強い情操を持つ代りに一面正等なる理解に従ひ兼ねる嫌ひがあります。實に尊敬す可く貴い人ではあるが病的矛盾を固執する偏執の人でもあるのです。だから宗教的に有價値の現象は幻覺に非らずてふ偏見に禍ひされて『閉目の時見れた物が開目の時消ゆれば幻覺だが閉目開目同様ならば本物である』とか又は『幻覺は心が苦しいが眞佛は喜悅を覺ゆる』とか頗る低級な解釋をなし居るのは心理學的無智に依て掛歪された偏見たる事を證明して餘りあるかと思ひます。又た法眼に就きまして有相の幻覺を以て『法眼なり』と解釋す可きでない事は明かなる事實でありまして夫は一種の天眼に過ぎません。法眼は有相無相に係らず其宗教經驗の奥底に如來様の大慈悲法に徹見

し得た無漏智に名付けたもので大無量壽經には『法眼觀察究竟諸道』と云ひ慧遠大師は『智能照法故名曰法眼』と釋して居ります。法の字に注意すれば解る事でありませう。大乘の法眼は之を要するに如來様の慈悲を如實に見得して眞諦の理に入つて以て菩薩の無生法忍を悟る處に云つたので更に進んでは衆生救済の爲めに一切の法門を照見する所の眼なのであります。よし夫が心理學的にば幻覺であつても其幻覺の奥底に無生の理を悟るなら法眼の一分である事無論の事でありませうけれども幻視の眼其物に名付く可きでない事をしらねばなりません。又た法眼は『五妙境界を見る』と云ふ妙は法の妙を云ふので事の妙を云つてゐるのではありませう。事に即せる若しくは事に内在せる法の妙境を照見する事なのであります。然し夫は慧眼と法眼との混同若しくは誤解なりと云ふならば筆を改めて更に申上げて見てもよいと思つて居ります。夫は私だとして可成りさう云ふ經驗は持つて居るのであります。或は肉眼的に大きな月光の輝きを見たり或は自分の念佛の聲に身體が全く包ま

れて宛かも厚き雲の中に逍遙遊するが如き感に浸つたり或は振梃棒を持つ惡鬼を見たり或は赫々たる太陽の熱に頭部を焼かれたり或は大小の佛像を見たり或時は暗黒の中に金色輝く草書の無字現はれやがて夫が楷字の間と變り更に篆字の春と變化して無間春てふ長閑にして優かなる法悦に歡喜したり色々様々な事もありませうが夫は唯だ其時限りの現象で問題にする様な物ではありません。唯だ切實の望みとして清淨法眼の獲得が祈られる丈なのであります。實際私には最早や有相の物は靈の糧となる事が出来なくなつて仕舞つて居ります。唯だ一つ如來様への戀こそ私の命であります。噫さるにても私達の辨榮聖人は缺點を如何に強く力説せられました事よ。誠に五日間の御說法諄々として倦まず如來様への聖戀を説き給ひし尊さよ。噫々本當に私達は幸せ者です。右と左とに辨榮聖人士屋上人を得て我が成佛道が資助せらるゝ事、是程に迄如來様の御慈悲が私の上に加祐せる事を思ふと本當にぐずぐずしては居られません。偕て愈々五日間の別時も終つて其夜直に私達は御聖人

と同じ汽車で歸途につきました。汽車は大變混雜しましたが如來様は私をして御聖人の眞向ひに座席を與へしめられ而して終夜御聖人様から如來様への戀物語をして下さつた事は本當に本當に忘られ得ない記念の一つであります。然かも翌月一日から三七日の間御隨行申上げて親しく御教へを受ける事を許されたのも此汽車の中なので御座います。噫々今度こそは信仰の徹底を期したいものです。噫々本當に今度こそは命にかけて私の信仰を徹底させて頂きたいものです。いよいよ十月の三十日に旅の仕度を調へて暫くの御別れを告ぐべく本堂に行き本尊様に宛かも生きた人に物云ふ如く祈りの御念佛を思ふ存分に續けて居ますと感情が段々激して參りまして『是非徹底させて下さいませ。徹底する事が出来なかつたら本當に死なせて下さいませ』と流涕漓々として泉の如く本當に眞劔に祈られるのでありました。噫々本當にぐずぐずしては居られません。本當にぐずぐずしては居られないのです。あゝ如來様よ。あゝ本當に戀しい戀しい如來様よ。(續)

還愚の體驗

中野 尅子

目にも見ぬ佛でなものを有る様に心得て有難がつて居る人間より馬鹿氣た者はない、いい加減な架空的な概念を作り上げて、其ものに因て自分が規定されて行かうとするより低級な事は無い、都合の善い偶像を造て、それに導かれて行かうとする。此等を『信仰ある人』と云ふのださうだが、それは私等から見ると信仰無き人と寧ろ名付可き連中であると思つてゐた。

けれど斯云ふ馬鹿者になる事は惻巧者になるよりは却て難かしい事を今に至つてつくづく感ずる皆の人は惻巧者にならう智慧者にならうと一生懸命に努めてゐるが其極は本當の愚か者になるのだ本當の智慧者は智慧が要らなくなつた程の馬鹿者の事だ、法然上人が十九歳の時までに既に佛教學の一班を研究し盡し、それから四十三の御歳まで或は經藏に入つて獨り聖經に眼を晒し、或は出で、南都近畿に問學して名實共に智慧第一の大學者に

なり乍ら尙満足する事が出来なかつたが、佛のみ心が一度已が心底に透徹するや釋然として疑團氷解し『一文不知の愚鈍の身になして唯一向に念佛すべし』と心から叫ばれたのである。永い問學問の林の中に惱まされた法然上人にして、始めて學解を己めよ、理談を止せと本當に云へるのである單に『不合理なるが故に我れ信ず』と云ふ底の神秘主義と違ふ。不可解なるが故に無理に信じ、仕様事なしに云ふなりになるのでは無い、最も合理的にして又最も明解なものでなくては、根底から動かす大偉力とはなり得ない、信の力は實に此最も明瞭なる力であり生命である。故に不完全な概念や説明で猶十分に顯はし得ない程である、故に我言辭に虜はれるな我々等しき體驗にまで來れど、法然は斷せられたのである。親鸞は『よき人の仰せ蒙りて信する外に別の仔細なきなり』と議論解頤の衣を脱いでスツボリ法然に歸命せられた。尙いつも『かく申すも計らひなり』と自省して其書いた物、話した所に停つて居れず常に恒に求め求めて不斷に向上せられた、眞に求道に驅られてゐる

しく證信に達するが爲めである。

ものには書いた丈けや話した位で、此れで大成したなどと濟まして居れぬ衝動を常に感ずる、選擇集の末尾にも『高覽を経たる後は壁底に埋められたし』と願て居られる、如何に元祖が求道に切であつたか、ソクラテスが常に道を求めて路頭に終つた様に、又イエスが時々弟子をも退けて靜かに祈つた様に、皆な此等の人は還愚の人であり、愚禿の人である、其他芭蕉にせよフランシスにせよ、或は釋尊にせよ孔子にせよ、皆道を説く人では無くて、皆道を求める人であつた。教學を大成して其れに閉ち籠て居る人では無くて、皆祈りに因て念佛に困て型をぶち壊しては前へ前へと進まれ、新しく新しく建設せられた人々である。そこに宗教の尊さがあり、理論と説明が總てで無い譯がある。それで學問も要らなくなるまで學問をせねばならぬ、そして所謂愚痴文盲の素直さに還るのだから『源空が申す念佛も阿波介が申さん念佛も一つなり』となり得るのである。宗教の奥を究める事は一面非常に困難にして又一面非常に容易なる事である。仰信から入る人も解信から入る人も等

しく證信に達するが爲めである。宗教の儀禮などを低級だと嗤つてゐるのは、宗教を智の對象に置いてゐる人だ、智の對象としての宗教を見た人には宗教哲學より見ぬ、宗教そのものの實體は信の對象である。信の世界に入て宗教の事實に觸れてゐる人には有象の事態は問題の問題とする處では無い、念佛して居よう座禪して居らうと、繪像を懸けて居らうと子供に戯れて居らうと、最早そんな物に心が引懸つて居らぬ心は常に如來に通ひ神と一づである。外界からは如何様に見えやうとも信は常に爰に在る。智の世界から信の世界に轉入する時『尼入道の無智の輩に同じうして』の解脫道がある、一たび此信に觸れて智は其生氣を吸ひ、智の智でなくて信の智として甦て來る。即ち起行に即する安心、聖書に即する祈りであつて即一の生活、不二の人格となつて來る。それを安心聞きになつたり聽聞倒れになつたり、盲念佛になつたりアンチクリスチャンになつたりする、此知と信、解と行、説明と生活とは相即して始めて權威あり又眞實と云はる可きで

ある。

それで宗教は單なる神秘でない

行く坂の速きも時、興へられたる新しい大正十三年の正月を迎へる人生の中に於て爲すべき事の多き事が出来た。

極めて合理的なる一事實であるが、も時たらずして空しく過ぎ行かん喜びに充ちた正月を迎へました、

かど云ふて説明を聞いただけで、その目に見るほど明かなり、されば年新たまりたるを共に又行ひも心

れ丈けの事かと云ふ丈けにも止ら『強健有力の時』の文句も思いやらをも新らしくなつて行き度い、益

ぬ一の事實である、饅頭の味を説いて『人生幾何の時があらん男子々如來様に御すがりして人間らし

明すれば唯だ一言に盡るが眞の味須く一決すべし』との感情むらがい生活をして行かうと思つて非常

は其言外に在る様に、又其の眞の味須く一決すべし』との感情むらがい生活をして行かうと思つて非常

味を語らんとすれば數萬言を積んず候、むしろ知己を百年の後に待りました。

でもまだ足りない様に、事實と云て孤軍奮闘するも亦可ならずやと思ひ出して見ますと大正十二年の

ふもの、奥には深みがある、然し家族とは互に協力し合ふ可きも家正月や其前々の十一年の正月など

其深みもたゞ一つ體驗を以てせば、族の爲めに大なることを犠牲にす只廻禮してお目出度う御座います

一言なくして掴み得る宗教は實にるは惜しきことにて候。

此邊愚の體驗そのものに在る。

○廣島 中野治榮様より。

明けまして御目出度う御座いますといたしまして今までに自分のな

鳴呼御なつかしいお上人様其の後して來た事が罪多い事はかりであ

は非常に御無沙汰いたして居りまゐりましたのです、よくもあんな事

したお變りもあらせられず益々御が出来たものだあと今更恐ろし

法の華咲きは浪花の池の懷しや、精進の御事と思つて喜んで居りまゐり様で御座います、よく今まで罰

さるにても得がたきは時、！過ぎす、私も身も心も共に無事に此のもあたらす無事に來たものと思

◆吾朋便り

○清水 辨康様より。

懷しき御はがき拜見いたし候、

これからは二度と再びそんな事をんど御字跡も何と書いてあるかわ

繰り返さない様にして行かねばなからぬ程でありました堂守が留守

らないのであります。

此度の正月の休暇を利用して用件事にて信じがたく残念であります。

のため香川縣仲多度郡本島と言ふた、堂守の歸へるまでと思ひまし

内海の小さな島に參りました、其たが汽船出發の時間の都合もあり

島に宗祖法然上人様の御遺跡としましたので仕方なくかへりました

て爪刻御名號を御安置してある阿色々と御苦心なされました事が思

彌陀堂と云ふものがありましたのひやられます、私などの身である

で行つてお詣りいたしました、御と其道に入つて行く事は不可能な

堂守は外出留守中でありまして其事であります、大いに奮勵努力い

堂内には四五人の中年以上から老たさねばならない事と思ひます、

づして見せていたゞきましたたが殆の新年號の眞生有難く拜讀いたし

とこの事で御由緒の事もあいまいの奮勵なされん事を御祈りいたしま

る丈の事はやらねばなりません、

疑ふといふ事は尊い事だ

疑ふ丈けに對象が認められ

てゐるからだ

問題にもならぬ問題の多い

中に

問題になり非難される事は嬉

しい

筈が欲しけりや敷へ這入れ、

念佛の藪

○道友の諸兄へ

人の一生を一生の中の一生と見す
永遠の中の一生と見、一日の中の
一日を一日の一日と見ずして、永
遠の中の一日と見來るとき、眞に
私共の一生一日は最も謹嚴に最も
眞剣なるべき人生の一日一生であ
るのではないか。

世間の人々によし入れられず、世
間の人々によし誇られても、自ら
省みて疚からずは何をか恐れん。
我等は如來の大道に生き、我等は
永遠の生命に生く、そこには永生
の光輝き。そこには永遠の生命輝
く、道の爲めに我をも忘れし古人
を想へ、王位を捨てたる釋尊の如
き十字架に懸りしキリストの如き
すべては慈光の生活でないか、肉
の奴隸となつて名利の支配を受く
る如きは決して眞人の行くべき道
ではない。(念)

寄贈並誌代拂込芳名

△寄贈の部

○金貳拾參圓桑名光明會○金拾
圓岐阜本誓寺様○金五圓神谷善
之進様高橋榮一様藤田うの子様
名古屋崇徳寺様○金參圓前田誠
月様

▽誌代の部

○金參圓半田應稱院様桑名光徳
寺様吉川聖善様三輪孝一様岐阜
本覺庵様○金貳圓安田依順様八
木信剛様玉腰孝俊様渡邊初枝様
若見祐道様森本源之助様玉木辨
靜様瀧澤庄平様更地堀淨月尼様
○金壹圓小林信太郎様日比崇徳
様桑名十念寺様山本甚太郎様渡
邊金次郎様伴野三郎様浦賀専福
寺様藤井貞邦様徳永アイ様笹木
新八様石川良丹様小川繁文様野

村光圓様小澤安子様森密子様杉
崎彦太郎様○金壹圓五十錢竹村
清音様○金壹圓山田正圓尼様○
金拾圓貳拾錢上阪伊之助扱石井
庄太郎様黒岡仁太郎様藤井専三
様中野スミ様長島文吉様服部梅
吉様山下ヒロ様角井くに様赤穂
孝三様○金四圓百々治之助扱清
水榮次様中島様小西様百々治之
助様

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 發行人 土屋觀道
東京市芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社
東京市芝公園三田四國町二番地三號

印刷人 三井清次
東京市芝公園三田四國町二番地三號

印刷所 玄々堂印刷所